

月刊ヨハク 令和6年12月号(第16号)

ある読者からのお便り(シリーズ2「Who cares?」)第1回

英語で care(ケア) という単語を使う時、多くの場合シンプルに「気にする」「気にかける」という意味で用いられる。しかし日本語でケアという言葉を用いるのは医療行為に関わるときが多く、どこか複雑で近寄り難い印象すらあるかもしれない。そんな形式的なケア概念を離れて、新しくケアについて見直してみたい。

とある海外アニメのワンシーンに感銘を受けた。二人の登場人物が敵陣で離れ離れになってしまったもののなんとか再会できたことを喜ぶ場面だ。以下がそのセリフであり、()内には私の意識を入れた。

A: Did they hurt you? (怪我はしてない?)

B: No no, I'm okay. Did they hurt you? (ううん、私は大丈夫。あなたこそ大丈夫?)

A: Who cares?! (私はどうだっていい!)

B: I DO!!※ (そんなわけない!!)

※強調として大文字を用いた。

“Who cares?” というフレーズは「誰が気にする?(いや、誰も気にしない)」という反語表現で、「気にすることはない」「バレないよ」「どうでもいいだろ?」「放っておけ」などといった使われ方がある。

例に出したAのセリフは、相手を想うあまりに飛び出した言葉であり、気がかりが解決した安心の表現でもある。(私のことは)気にしなくていい、つまりは相手のほうが大切にこれ以上はないという気持ちを“Who cares?!”と言い切った。君さえ無事ならそれでいいと、対話を打ち切ってしまうような言葉でもある。それに対してBは“I DO”と返すが、これには省略された部分があり“I DO (care about you)!!”というのが全貌である。Aの「誰が気にするもんか」という言葉に対してBは「私が」あなたのことを気にかける、と答える。

本来、“Who ~?(誰が~しますか?)”という文は疑問文であり答えを得る目的があるところを、“Who cares?”は問うまでもないものをわざわざ問うことで「当然」を強調する。つまり問いではないし、答えなど最初から求めていないのである。それに対して“I DO”と普通に答えてしまうことで、本来の「問うまでもない」という前提を正面から覆してしまう。反語表現をただの疑問文へと引きずり下ろしてしまうのがこの応答なのだ。

このあとAはたじろぐこともなく自然にBに笑いかけ、ハグをする。AのなかでBの返答はいかにもBらしい、といったところだろうか、この一連の流れは二人の関係性がいかにお互いの眼差しに満ち溢れたものであるかを表している。

(2へ続く)

深谷太一弁護士連載コラム⑩「おすすめ Book」

岡本茂樹『反省させると犯罪者になります』(新潮社、2013年)

この本は、知り合いから聞いて気になっていたもので、最近、読んでみました。

「反省」とは、一般に、自分の良くなかった点を認めて、改めようと考えることなどとされています。犯罪行為をした人に「反省」させるのが当然と考えられていますが、著者は、受刑者の更生支援の経験から、「反省」が再犯の防止に役立っておらず、本音を話すことにより自分が起こした事件と向き合うことができるようになると指摘しています。

私は、精神科に入院中の方の退院に関わっていますが、病院からは、入院のきっかけとなった出来事について、「振り返り」や「内省」ができていないと言われることがあります。入院のきっかけとなった「出来事」の有無については、刑事事件と異なり、厳密な手続で認定されるわけではありませんが、周りから見て「反省」させるべきと考える出来事があったとしても、「振り返り」や「内省」だけを求めることは、著者の指摘からすると、逆効果になるのではないかと感じています。

